歴史に学ぶ現代の諸課題
～タペストリー巻頭特集を活用して～

人類が直面する新たな感染症の脅威

長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野教授　山本太郎

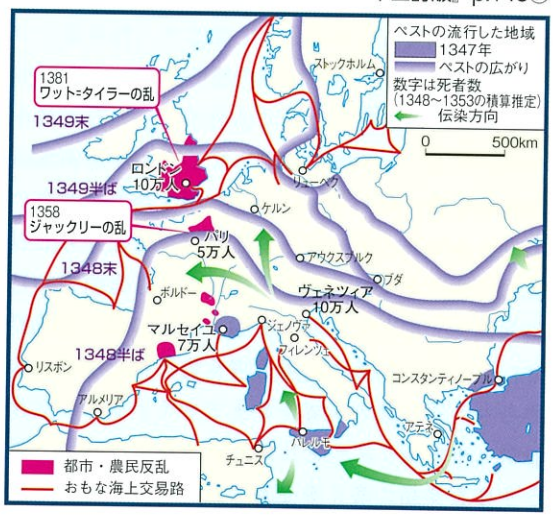
●はじめに

感染症は，社会にさまざまな影響を与えてきた。ペスト（黒死病）を中心に，その例をみてみることとする。

中世ヨーロッパで流行したペストが，最初に彼の地に姿を現したのは1347年で，コンスタンティノープルをはじめとする地中海の主要都市だった。1348年にはいると，１月にアヴィニョンに発生したのを皮切りに，４月にはフィレンツェ，11月にはロンドンへと北上し，翌1349年にはスウェーデン，ポーランドへと達し，1351年にはロシアへと広がった。

最終的に，ヨーロッパでこのときのペスト流行をまぬかれた人はいなかった。否，一時的に流行をまぬかれたとしても，流行は次の機会にその集団を襲った。居住地や宗教や生活様式に関係なくペストはヨーロッパをなめつくした。死者数は2500万人とも3000万人ともいわれ，ヨーロッパ全人口の３分の１から４分の１にも達した。

〈図１〉『最新世界史図説タペストリー　十四訂版』p.148⑦



●ペストの起源

2010年10月31日づけで，国際研究チームによるペストの起源についての論文[1]が発表された。世界各地から収集された17株のペスト菌の遺伝子配列が解析された結果，ペスト菌の共通祖先が中国に起源をもつ可能性が高いこと，その菌が「絹の道（シルク=ロード）」を通してユーラシア大陸の西側にまで達した可能性があることが報告された。

論文はさらに，15世紀中国明代（1368～1644年）に実施された鄭和（1371～1434?年）の大航海もペスト拡大に寄与した可能性があると指摘している（航路は『最新世界史図説タペストリー　十四訂版』p.34～35の地図参照）。鄭和の大航海は，インドからアラビア半島，遠くアフリカのケニアまで合計で７回にも及んだ。清代に編集された歴史書『明史』によれば，初回の航海は，62隻の船団，総乗組員は２万7800人だったという。

ペストはこの時期，鄭和の大航海やユーラシア大陸を横断する交易路の整備といった，交流の質的・量的変化によって各地に広がったのである。

〈図２〉『最新世界史図説タペストリー　十四訂版』p.114③

▲③鄭和（ていわ）の大航海の想像図（近年の学説では，マストの数は6本とされる。）➔p.34

写真：シーピーシー・フォト

●文学のなかにみられるペスト

ボッカッチョは『デカメロン』にそのときのようすを書き記している。『デカメロン』は，1348年に流行したペストからのがれるために邸宅に引きこもった男３人，女７人の計10人がする退屈しのぎの小話を集めたという趣向の物語である。10人がそれぞれ１日１話を語る。全100話からなる人文主義の傑作とされているが，作品の背景には，ペストにあえぐ当時の社会状況が色濃く反映されている。

「一日千人以上も罹病しました。看病してくれる人もなく，何らの手当てを加えることもないので，皆果敢なく死んで行きました。また街路で死ぬ人も夜昼とも数多くありました。また多くの人は，家の中で死んでも，死体が腐敗して悪臭を発するまでは，隣人にはわからないという有様でした」

「墓地だけでは埋葬しきれなくなりまして，どこも墓場が満員になると，非常に大きな壕を掘って，その中に一度に何百と新らしく到着した死体を入れ，船の貨物のように幾段にも積み重ねて，一段ごとに僅かな土をその上からかぶせましたが，仕舞には壕も一ぱいに詰まってしまいました」

（『デカメロン―十日物語』野上素一訳，岩波文庫）

●ペストがヨーロッパ社会に与えた影響

ペストが当時のヨーロッパ社会に与えた影響は，少なくとも３つあった[2]。第１に，労働力の急激な減少が賃金の上昇をもたらした（図３）。農民は流動的になり，農奴やそれに依存した荘園制の崩壊が加速した。第２に，教会が権威を失い，一方で国家というものが人々の意識のなかに登場してきた。第３に，人材の払底が，既存の制度のなかであれば登用されることのない人材の登用をもたらし，社会や思想のわく組みをかえる一つの原動力になった。結果として，封建的身分制度は，実質的に解体へと向かうことになった。それは同時に，新しい価値観の創造へとつながっていった。

半世紀にわたるペスト流行の恐怖のあと，ヨーロッパは，ある意味で静謐で平和な時間を迎えた。それが内面的な思索を深めさせたという歴史家もいる。気候の温暖化も一役買った。そうした条件

	1332/33	1350/51	変化
収　入			
地代および小作料	5.80	1.18	▼
穀物の販売収入	33.10	20.20	▼
家畜の販売収入	6.50	3.90	▼
畜産物の販売収入	2.70	0.17	▼
その他	3.00	0.13	▼
販売されずにおかれた生産物	7.30	6.70	▼
総　計	57.13	33.60	▼
支　出			
建物・土地利用のための資産	5.11	3.17	▼
賃金	7.00	14.14	△
家畜	4.15	1.10	▼
播種用の種子	1.18	4.15	△
その他	27.70	29.50	▼

（単位はパウンド・シリング）

〈図３〉黒死病の前後におけるクックスハム荘園の収支計算[3]

のなかでやがて，ヨーロッパはイタリアを中心にルネサンスを迎え，文化的復興をとげる。ペスト以前と以降を比較すれば，ヨーロッパ社会はまったく異なった社会へと変貌した。強力な国家が形成され，中世は終焉を迎える。そして近代を迎えたヨーロッパは，やがて新大陸やアフリカへの進出を果たしていくことになった。

●ヨーロッパにおける最後のペスト大流行

中世以降も，ペストは繰り返し西ヨーロッパを襲った。1665年から66年にかけてイギリスを襲った際は，ロンドンで約10万人の死者を出した。この流行は「ロンドンの大ペスト」とよばれる。「捜査員」――しばしば文字の読めない老婦人だった――は，病人を見つけ出すと家に閉じ込め，「われに慈悲を」という言葉とともに，ドアに赤いバツじるしをつけた。教会は悲しむ者であふれ，共同墓地は遺体であふれた。宮廷関係者だけでなく，医師や聖職者も街をあとにした。

この時期，ケンブリッジのトリニティ・カレッジを終えたばかりのひとりの青年がいた。ペストの流行によって，青年の通っていた大学も何度かの休校を繰り返した。休校中大学を離れて故郷の街ウールスソープに帰った青年は，ぼんやりと日を過ごすうちに，「微積分法」や「万有引力の基礎的概念」を発見する。その一つ一つは，近代科学にその基礎的わく組みと考え方を提供するものとなり，その後の世界をかえていく。青年の名前はアイザック=ニュートンといった。ニュートンが主要な業績の多くを発見したこの期間はのちに「創造的休暇」とも「やむをえざる休暇」ともよばれることになった。そしてこれが，イギリスにおけるペストの最後の大流行となった。

南ドイツ・バイエルン地方の小さな田舎町オーバーアマガウで，10年に一度，100日以上にわたって開催されるキリスト受難劇の歴史も，ペストの流行と関係する。ボヘミアにおけるプロテスタントの反乱を契機に始まった三十年戦争（1618～48年）は，南ドイツにペストをもたらした。ペストが大きな被害をもたらしたあとの1633年，村人は，それ以上の犠牲者を出さないため，イエスの苦難と死と復活の物語を10年に一度上演することを誓った。最初の公演は翌1634年，流行を生きのびた人々によって，ペストで亡くなった人々の眠る墓の上につくった舞台で行われた。言い伝えによれば，それ以降この村で，ペストで死亡した住民はいないという。

1720～22年にかけてマルセイユでみられた流行を最後に，西ヨーロッパにおけるペストの爆発的流行は終わりを告げた。都市環境の整備，宿主であるクマネズミのペストに対する抵抗力の獲得，気候変動，検疫などいくつかの可能性が指摘されているが，なぜこの時期にペストが西ヨーロッパにおいて突如その流行をとめたのか，今にいたるまでなぞなのである。

●歴史のなかの感染症

感染症の記述は古くからある。19世紀にアッシリア遺跡から発見された遺物の１つ『ギルガメシュ叙事詩』のなかで，大洪水よりましな４つの災厄の１つに疫病神の到来があげられている。これは，麻疹や天然痘といった急性感染症が文明を周期的に襲ったことを示している。

ところで，『ギルガメシュ叙事詩』にはこんな物語も残されている。当時からメソポタミアには森林資源が乏しかった。王ギルガメシュは街を建設するために木材が欲しい。そこで，たたりがあるからやめておけという周囲の制止を振り切って，親友のエンキドゥとともに旅に出た。森を守る精霊フンババは，ギルガメシュたちと戦うが，最後はエンキドゥによって頭を切り落とされてしまう。切り落とされた頭はおけのようなものにいれられる。フンババが殺されたあと「ただ充満するものが山に満ちた」とある。こうして森は神から解き放たれ，人間のものになったという。

エンキドゥをたたら場のエボシ，フンババをシシ神とおきかえれば，映画『もののけ姫』と同じである。文明の発展と自然破壊――。

自然破壊や環境破壊がもたらした例といえば，エイズやエボラ出血熱がある（図４）。これらの感染症流行の発端には，都市化や人口の大規模な移動，内戦などによる社会資本の破綻があったことはいうまでもないが，植民地主義や「開発」の名のもとに行われた無秩序な熱帯雨林（生態系）への進出があった。生態系への無秩序な進出と，それが及ぼす生物多様性の破壊は，ウイルスをはじめとする微生物の本来の宿主（住処）である動物の減少や絶滅をもたらしている。結果として，それが，微生物が新たな宿主としてヒトを求める原動力になったという研究者もいる。微生物も自らの生き残りをかけてこの世界に存在しているのだから，と。

歴史はさまざまなことを私たちに教えてくれる。

〈図４〉『最新世界史図説タペストリー　十四訂版』巻頭p.Ⅷ
⑦エボラ出血熱で死亡した患者の遺体を運ぶ赤十字の職員（写真：AFP＝時事）と⑧エボラウイルス（写真：EPA＝時事）

註

1　Morelli, G., et al., *Yersinia pestis genome sequencing identifies patterns of global phylogenetic diversity*, Nature Genetics.

2　William L. Langer, *The Black Death*, Scientific American 210 (2)：114-121.

3　W.アーベル著，寺尾誠訳『農業恐慌と景気循環　中世中期以来の中欧農業及び人口扶養経済の歴史』（未來社，1972年）